

2. ラオス・タイとの国境 ～西双版纳タイ族自治州「景洪市」～

インドシナ半島の諸国家の中核国家は何と言ってもタイであろう。中国とタイは直接国境を接してこそいないものの、ラオスを経由して往来が盛んである。このルートは昆明から南下し、雲南省最南部の西双版纳タイ族自治州「景洪(Jinghong)市」から「磨憨(Mohan)国境」を経由してラオスに入るルートである。西双版纳は高い山々が連なる地域でもともと交通は不便だったが、最近の中国側における交通インフラの整備によって時間距離が急速に短縮されつつある。



雲南省を南に向かうラオス＝タイルートは、前回紹介した西に向かうミャンマールートより道路の整備状況が比較的良好。これはこのルートの物流がミャンマールートより重要だからというわけでは必ずしもなく、恐らくこの地域が非常に高い山々で村ごとに遮られているために、道路を作るのであればトンネルと橋で一気に抜けるルートしか考えられなかったことが主な原因と思われる。それほどまでに西双版纳は高い山々が連続しており、山を越えれば民族習慣も異なると言われるほど多数の少数民族が暮らしている地域なのである。

現在、西双版纳市の中心地「景洪市」からラオス国境の「磨憨」までの道路は、二級公路とはいえトンネルと高架道路で山々を貫く路線が2008年に開通している。更に、今回は確認できなかったものの鉄道ルートも建設が始まっているようで、山岳地帯ゆえ難工事が予想されるものの数年後にはこれも完成する見込みであるという。

(1) 「景洪＝磨憨」道路

この道路は、昆明からバンコクにつながる路線であるが、2008年に現在の新路線が開通するまでは山肌を縫う細い道(右写真)しか整備されていなかった。現在は旧道の脇をトンネルと高架橋で抜ける新道路が整備されたおかげで、「景洪＝磨憨」の時間距離は6時間から4時間程度に短縮されている。





←2008年に開通した新道。  
山頂まで植えられている樹木は天然ゴムの木。

しかし、この道路は片側一車線のみで追い越しができないこと、行き交うトラックの交通量がかなり多いこともあり、「景洪市」からラオス国境の磨憨までは4時間程かかる。また追い越しに関連した事故もよく見られ、いったん渋滞が発生するとどこからともなく周辺の農民がやってきてゆで卵等を販売し始める光景が何回か見られた。見る限り、渋滞は日常茶飯事のようなのだ。



↑ 事故や工事で渋滞する車に手慣れた雰囲気ゆで卵等を販売する農民たち。ゆで卵は自分の家のニワトリが産んだものということで味わいがよい。1個1.5元。

ただ、こうした問題はあるにしても従来の道路より格段に走りやすくなったことは間違いなく、これまでは西双版纳からラオス国境の磨憨までは途中の勐腊（Mengla）で一泊するのが普通だったのが、今ではその必要はあまりなくなっている。

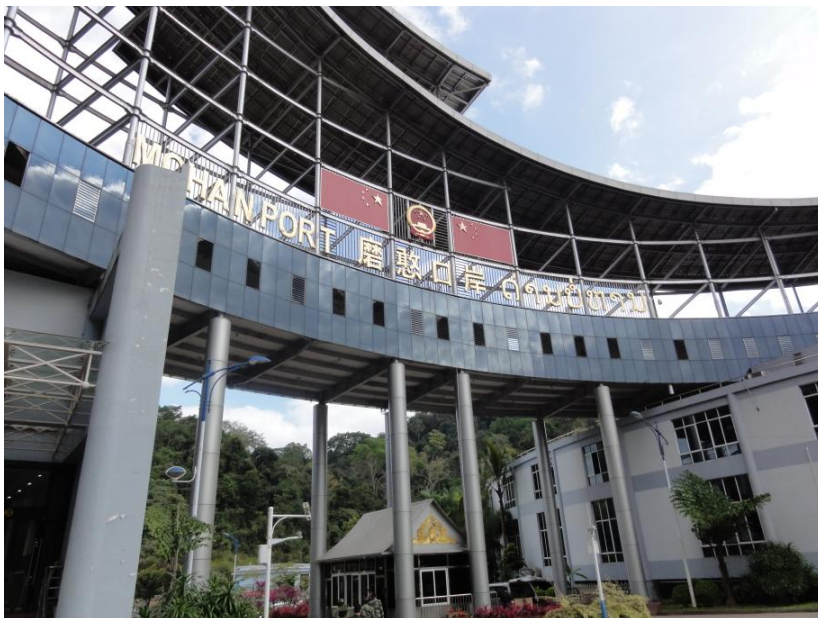
ラオス国境の町磨憨はよく整備され、新しい住宅・商店が道路沿いにきれいに並び、中央分離帯も美しく緑化されていた。景洪や昆明までの直通バスもあったものの、観光客の多くはタイまでの直通バスを利用するようで、この町で滞在する人数はあまり多くないように見受けられた。



←やや人工的な印象ながらきれいに整備された磨憨の街並み。

## (2) 磨憨国境ゲートに見る中国とラオスの格差

ラオスとの国境ゲート「磨憨口岸」は最近改築されたようで近代的な設備が整っていた。深圳ですら目にしないようなパスポートを挿入すると出入国カードに自動的に必要事項を記入してくれる装置もあり、通関効率は高いようだ。



←新鋭設備を持つ磨憨口岸

2007年からは日本人はラオスにノービザで入国できるようになっているので、今回は磨憨口岸を抜けてラオス側の町「磨丁（ポーテン）」まで歩いてみた。ラオスの国境ゲートは中国側のゲートを抜けてから山道を10分程歩いたところにあるが、まるで昔の田舎の小学校のような木造建築で、一人当たりGDPが中国の3分の1以下という、中国とラオスとの「格



差」を肌で実感できるつくりとなっている。しかし中国側が国境ゲートビルを改築したことに対抗してか現在ラオス側でもかなり派手な国境ゲートビルを建築中で、これが完成すれば少なくとも国境ゲートビルでは引けを取らない形になるものと思われた。



←木造平屋建ての質素なラオス側国境ゲートビル（左）と、現在建築中の新国境ゲートビル。

さて、人や物の流通については、まず人はラオスからよりもタイからのツアー客が目についた。ミャンマー国境で見られたような「国境の向こうから中国への人の流入」は磨憨口岸ではあまり目立たないようで、大きな経済格差があるにもかかわらずこの点は意外に感じた次第である。通関の際の税関検査も簡単なもので、麻薬や禁制品の流入をそれほど警戒している印象を受けなかった。

物流については、今回訪問したのは平日の午後だったが、専らラオス側から中国に通関待ちするトラックが多く、逆はあまり見られなかった。荷物は見る限りコメのようで、運んでいるトラックは日本の中古車が多いようで、「アルナ急送」とか「ジェット便」という文字が車体に書かれていた。



国境を越えたラオス側の町「磨丁（Boten）」は町というよりむしろ道路沿いに商店が並んでいるだけというほうが正しいようだ。商店で扱っているのは中国製品が多く、建物も中国側の磨憨とは比較にならない質素なトタン葺きで、衛生状態も劣っていた。



↑国境を抜けるとラオスの町「ボーテン」。中国側と比べて明らかに寂れている。

### 3. 急速に豊かになりつつある中国内陸部の都市と農村

今回、雲南省の最西端（瑞麗）と最南端（景洪）を訪問して感じたのは、昆明からバスで8時間程度かかるこれら「辺境の辺境」とでも言うべき地域においても、生活水準が急速に向上していることである。「瑞麗」や「景洪」といった中心都市では、ヤシの街路樹や独特のタイ風建築を除けばここが雲南省の奥地にあるということを感じられないほど発展しており、車も多く、携帯電話をはじめとして高額品を販売する店も目についた。



↑ヤシの木とタイ語の標識以外は他の大都市とあまり変わらない景洪市内の風景。

特に景洪市は人口も50万人規模の大都市で、メインストリートには正規のものではないかもしれないがアップルストア（携帯電話会社と提携していない独立店）もあり、消費意欲は旺盛に思われた。もちろんこうした商品を購入できる客は少数に違いないが、それでも所得に応じてコピー品から正規品まで様々な携帯電話を売る店が100m以上にわたり連



なっている様子は壮観である。また、瑞麗や景洪と昆明を結ぶ飛行機（B737）は 1 日 10 便以上飛んでいるにもかかわらずほぼ満席でキャンセル待ちもとれないほどの盛況である。



←西双版纳の中心都市景洪のメインストリートにある真偽不明のアップルストア。木製テーブルのディスプレイも大都市のアップルストアと同じだ。

景洪や瑞麗のような都市部から離れて農村部に行けば、確かに生活水準は劣るようである。しかしこうした地域でも交通インフラの発達により景洪クラスの地方中核都市への往来は日常茶飯事となっている印象を受けた。若者は村に留まらずに都市に働きに出、あるいはおんぼろだが安価なバスに乗って気軽に町に出て、そこで現金収入を得るとともに新しい生活スタイルを身につけるようになっている。



←磨憨国境から 5km 程離れた農村の街頭風景。



←地元バスの車内光景。おんぼろさと持ち込まれる荷物の多さは尋常でないがこまめに停車してくれ料金も安いので地元民に人気がある。

更に、この地域の農村が豊かになっている理由には、バナナやコーヒー豆、天然ゴム等商品性のある作物の栽培がさかんという特色があると思われる。こうした特色が農村の収入を高めるとともに外部の情報に対する感度も高め、開放度を増しているのかもしれない。中国の農村全てが豊かになっているとは必ずしも言えず、従来どおりのコメやトウモロコシを作っている地域では人口の流出や「三ちゃん農業化」も進んでおり農村崩壊現象も見られるのかもしれないが、少なくとも商品作物栽培に適した環境が備わっている地域は、この雲南省辺境の農村を含め、しっかりと豊かな明日に向かって進んでいる印象を受けた。



←典型的な西双版纳の農村風景。山肌は頂上までゴムの木が植えられ、谷戸にはバナナが栽培されている。





←バナナの収穫。現場で箱詰めして出荷に向かう。



←国道沿いに点在にする産直ショップも農家の現金収入を増やす貴重な機会だ。

(以上)

Disclaimer: 本資料中の数字は注意してチェックしていますが正確さを保証するものではありません。

文章中意見にかかる部分は個人的見解でありいかなる組織の意見でもありません。